

# 近世身分社会の再把握 — 一九世紀・都市大坂の非人と町方 —

塚田 孝

## 少し長い【前置き】

昨年五月一五日に行われた市大日本史学会第一三回大会で講演させていただいた時には、近世社会を「身分社会」と捉えることで、視野が広まり、また社会把握の深度を深めることができると考えるようになったことを前提として、①韓国の伝統社会との比較史の可能性について述べ、②近世大坂の非人と町方の関係の再検討を行った。言うまでもなく、①が視野の拡大、②が社会把握を深めることの一例として位置づけていた。

こうした問題意識は、二〇〇九年七月に開催した国際円座「近世身分社会の比較史」を企画する目的であったし、この国際円座によってより強められた（「共同討論『近世身分社会の比較史』」『部落問題研究』一九五、二〇一一年一月参照）。そのような問題意識を持っていたためだろうか、二〇一〇年三月二五日から二九日にかけての韓国での研究交流・見学はとて大きな刺激を受けるものであった。この韓国訪問は、

韓国国史編纂委員会の金炫榮氏にお願いして、伝統社会の様子を窺える村の見学、比較地域史の研究会の開催を計画してもらったものである。韓国での日程は、次の通りであった。

三月二五日 韓国学中央研究院（ソウル近郊）

・デジタルアーカイブス（デジタルの地方事典）の説明と見学

・蔵書閣の史料閲覧（王室関係だけでなく、良洞村関係文書も）

三月二六日

・嶺南文化研究院・大阪市立大学大学院共同コロキウム「近世韓日地域社会比較研究」（慶北大学校）

町田哲（鳴門教育大学）「地域史研究の方法と意義

——日本近世史の立場から——

齊藤絃子（大阪市大生）「近世の村落社会と在地支配」

鄭勝謨（地域文化研究所所長）「朝鮮後期の地域社会と文化」

コメント（塚田孝・井上徹・金炫榮・劉明基）

・慶州・良洞村（ヤンドンマウル）見学（一五・三〇～一九・〇〇）

月城孫氏の宗家二〇代当主より書百堂で説明・懇談（菓子）、祀堂も見学（韓国中央研究院蔵書閣の良洞閔係史料を残してきたのもこの家）

三月二七日

・慶州博物館・石窟庵・仏国寺などの見学（新羅時代関係）

三月二八日

・安東で李退溪に関わる所を見学（胎室（生家）・宗家屋敷）

・陶山書院の見学・祭祀に参加（釜山大学校・鄭錫胎氏の案内）

・河回村（ハフエマウル）・屏山書院の見学

・鳳亭寺の見学

三月二九日

・韓国国学振興院の蔵板閣・儒教ミュージアムの見学

蔵板閣で陶山書院から移された板木など五万枚以上に驚く

振興院のスタッフと交流

市大日本史学会は、この訪問の直後だったこともあり、ここから得られた刺激について触れたのであった。そこでは、蔵板閣で見学した板木のインパクトが大きく、そこから日韓両社会の商品化の深度と伝統社会の共通性と差異について考えるところを述べた。そこで改めて自覚したのは、日本近世の強固な村落共同体の存在と、その一方での商品化の深度の深さである。それは多様な身分集団の展開と、その地位や役職の株化（権利化）と売買などにも通じていると思われる。この

経験から得られた、日韓比較地域史の豊かな可能性についての確信は変わらないが、市大日本史学会で口頭で話したことは着想にとどまっておろ、もっと具体的な研究などを参照して深めていかなければならない。そのため、この部分は本稿では省略することにした。

講演の後半で話した大坂の非人と町方の関係の再検討は、この間わたりが進めてきていた近世大坂の都市社会のなかでの非人集団のあり様を全面的・構造的に捉えなおそうという試みの一環であった。その後、さらに検討を加え、二〇一〇年八月二〇日の「円座…伝統都市の比較史」の「セッション5 周縁」（とらつと3・飯田市歴史研究所共催）や一〇月二四日の第四八回部落問題研究者全国集会の「分科会①歴史I」で報告し、また二〇一一年三月三一日にハワイで開催されたAAS (The Association for Asian Studies) の大会での報告を準備した。以下には、市大日本史学会での講演を踏まえつつ、英語圏の研究者も意識しながらまとめたAASの報告原稿「一九世紀・都市大坂の非人と町方」の日本語バージョンを掲載することとしたい。この原稿は、各論点について具体例を引きつつ概括的に示すことを目的にしており、より立ち入った検討と分析は別に行う必要があるが、市大日本史学会での講演の趣旨はほぼ含まれている。

## はじめに

都市大坂の形成と並行して、無所有の乞食・貧人として生み出された非人身分の者たちは、一七世紀半ばから四ヶ所の垣外仲間として都

市社会に定着した。彼らは、生きる道としての乞食・勧進を権利化するとともに、非人集団の周縁に生み出されてくる新非人・野非人の統制と救済をゆだねられていく。その延長上に、町奉行所下での警察関係の御用を勤めるようになるのであった。

非人身分の者たちは、勧進と御用に特化した集団として定着していたが、この両側面は、都市社会の関係性のなかでのみ存立しえたのであった。つまり、勧進はそれを与える町方・町人との関係抜きにはありえず、御用はそれを命じる町奉行所との関係、および垣外番として抱える町方との関係を示すものであった。

この報告では、町方での勧進権（町旦那株＝垣外番株）が垣外仲間の集団的な所有として確立していた一九世紀において、にもかかわらず勧進をめぐる両者の関係を、勧進を与える町方・町人の意向が制約する局面を抽出し、諸身分集団の重層と複合として存立する近世日本の身分社会の特質を浮き彫りにしたい。

なお、大坂には都市民衆の生活の基本単位である「町」が六〇〇以上存在したが、これらの町は北組・南組・天満組の三郷に編成されていた（塚田二〇〇二参照）。

### 一、垣外番株の売買と垣外仲間

天王寺・鳶田・道頓堀・天満の四ヶ所の各垣外は、トップに長吏、その下に数人の小頭があり、その下に一般の小屋持

非人たる若き者がいるという階層を成していた。彼らは家族を形成していたが、それとともに単身の新非人を弟子として抱えていた。弟子は三郷内の各町や大店の垣外番として派遣されたが、誰をどこに派遣するかは若き者などの小屋持非人が権限を持ち、それは垣外番株という形に結晶していた（塚田二〇〇二）。

一九世紀には、大坂町奉行所から盗賊捕縛などに尽力した者への褒

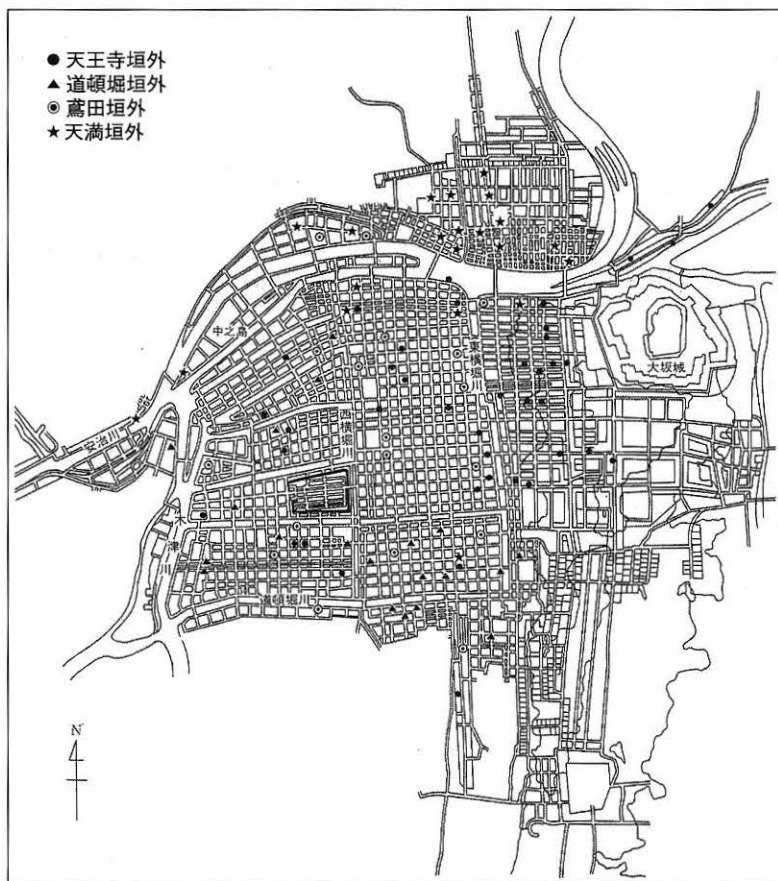


図1 四ヶ所派遣の垣内番の所在地  
高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ空間』東京大学出版会、1989をもとに作成

賞が行われたが、その中に垣外番も含まれており、その数一四四人を拾うことができる（塚田二〇〇七第五章補論）。そのうちの垣外の小頭・若き者の弟子であるかがわかる者を地図に落としたのが図1である。これによれば、四ヶ所の垣外の縄張りには、天満垣外は天満組の周辺、道頓堀垣外が島之内周辺など一定の偏りが見られるが、全体としては錯綜して展開している。それは、垣外番の成立・定着過程の特質と関わると思われるが、ここでは触れない。

垣外番株は垣外仲間の内部で売買・質入が行われていた。まず、垣外番株売買の一例を見ておこう。享和三（一八〇三）年四月晦日、天王寺垣外の若き者六郎兵衛は、御仲（長吏・小頭で構成）に宛てて、この度若き者源七所持の「駿河町昼夜番株」「神崎町利倉屋と申す酒屋様一軒番株」を譲り受けた（「買い受けた」ので、聞き届けていただき「株御帳面」を切り替えていただきたいと願ひ出ている（『悲田院長吏文書』五五一頁、後掲史料①）。

これによれば、垣外番株は、駿河町という町単位、あるいは利倉屋という大店一軒単位で株となっていたこと、それも昼番と夜番が区別されていたことがわかる。駿河町と神崎町は東横堀の東側で隣接する町である。なお、垣外番株は町旦那株とも呼ばれたが、これは若き者たちが町方・町人方に入力する関係を権利化（株化）した側面を表現したものである。この側面こそ、若き者が実質上の勧進権を確保していることを示すものである。

この垣外番株は、若き者源七が所持していたものを、若き者六郎兵

衛が買い取ったこと、この手続きは御仲の株帳面の切替えて完結することがわかる。この経過からわかるように、この手続き中に駿河町の者や利倉屋が介在していないことが重要である。報告者は以前に、近世社会には自らの地位や役職を株として確立し、雇用者などの進退を脱していく動向が広く見られたことを指摘したことがあるが、これはその典型である（塚田一九九四）。そして、これこそ身分社会の特質を示すものと言えよう。

これは一例であるが、一八世紀の終りから一九世紀にかけて同様な史料が見られるようになる。そのことの意味を考えるには、次の史料が参考となろう（「申渡事」『悲田院長吏文書』一〇八・一〇九）。寛政二（一七九〇）年七月に御仲から若き者たちに申し渡され、また小頭たちも遵守を誓っている内容である。これによると、今後所持している「町旦那株」（＝垣外番株）の売買・質入をしてはならない、しかし抱無事情がある時は、売主・買主から「当番」に文書で届け出て、売買に伴う帳切を行うこと、質入する時も質入・質取双方から文書で届け出ることと規定している。ここで「当番」とあるのは、御仲を構成する数人の小頭のなかの当番であり、実質的には御仲に届け出るという意味である。そして書留では、今後、内分で売買・質入して、後日発覚した場合は、その株を御仲に取り上げるので、心得違ひがないようにと念を押している。売買の場合、届け出た上で株帳面の切替え（帳切）を行うことが規定されているのに対し、その時点では所有権の移動を伴わない質入の場合、届出（承認）だけで帳切に言及されていないとい

う手続き上の違いがあることが注目される。

冒頭で町旦那株の売買・質入を禁じているかのようであるが、続いて「余儀ない事情があれば」当番に届けて売買・質入するという手続きまで規定しているのであり、実質は垣外仲間として売買・質入を公認する意味をもつ規定である。併せて、内分の売買・質入を禁止し、御仲の管理下に置くことを意図したものと見えよう。

おそらく一八世紀の後半には垣外番株（町旦那株）が形を成し、株を管理する御仲の株帳面も作成されるようになったと思われる（『悲田院文書』『悲田院長吏文書』）。一方で、徐々にその売買や質入も広がりつつあったのであろう。それに対し、天王寺垣外の御仲が売買・質入などを禁止すべきであるという意向を持っていたのは冒頭の文言から窺える。しかし、実際に売買・質入の趨勢を留めることはできない状況であり、売買・質入の手続きを決め、結果として垣外仲間として売買・質入を公認することに帰結したと理解できる。これ以後、売買・相続での株帳面切替え願いが多く残されるようになるのである。言い換えれば、垣外番株の売買などが垣外仲間内の秩序として処理されること、身分内法のレベルで規定されるにいたった段階と言えよう。

## 二、町法と垣外番

近世都市における「町」は、自らの町法をもつ自律的な団体である。報告者は、都市大坂の都市法を考える場合、①都市空間全体を覆う公儀法度、②多様な社会集団の内部を規律する法、③そうした社会集団

間の関係を規定する法の三つのレベルを総合的に把握する必要があると提言したことがある（塚田二〇一〇a）。町法や垣外仲間の法は、②レベルの法の例である。

町に派遣されている垣外番は、町の側からすると町代や下役（夜番人）、あるいは髪結などの様々な町抱えと同列に並ぶ側面を持っていた。そのため、町法のなかに規定されることも見られた。

堀江の北側に長堀を挟んで所在する白髪町には、文政五（一八二二）年五月の「町内定式帳」が残されている（大阪府立中之島図書館蔵、塚田二〇一〇a）。これは、二つの部分からなり、前半は町人たちが相互に守るべき規定を申し合わせた「町式申合せの事」である。後半は、「例年申渡帳」として、町から町代、夜番人、髪結、垣外番人への職務の勤め方や生活上の問題について守るべき箇条を申し渡した四つの文書からなっている。これら四つの申渡書は、四者それぞれの仕事や立場の違いで大きな差異があるが、抱える主体である町からの命令（申渡し）である点で、前者の町人たち相互の申合せとははっきり区別される。

このうち垣外番人への「申渡の事」には、次の三ヶ条が規定されている（後掲史料②）。①垣外番は、町人の家の軒下や浜先、橋の上下に「非人乞食」が立ち回ったり、寝転んだりさせないように日々町中を見廻ること。その上夜には火の用心のために見廻り、また不審な者が往来していたら、町内で立ち止まらせないようにすること。以上の昼夜番質と布施米・油代として一ヶ月に銭六貫八〇〇文を支給するので、怠りなく勤めること。この番質から「若き者」に配分し、町中を頻繁

に見廻るように申し付けること。以上のような第一条は、垣外番の仕事と報酬についての規定である。この規定から、垣外番の役割の根幹は「非人乞食」の町内での物乞い行為の排除にあったことがわかる。

②町人方で吉事（「悦事」）があつた時は祝儀を、法事や葬式（「不幸」）の時は志を、家柄相応に遣わすので、強請つてはいけない。第二条は吉凶勸進について、一定の保証を与えるとともに、悪ねだりを禁じている。③町用を勤めさせる「若き者」が木履・雪踏を履くことは禁止。第三条は、「若き者」の履物についての規定である。

第二条で、垣外番に一定の吉凶勸進が保証されていることは、第一条の「非人乞食」の悪ねだりの排除と表裏の関係にあり、垣外番として抱えられることが勸進権の確保を意味したことがわかる。垣外仲間において、垣外番株・町旦那株とされる所以である。

この申渡しを直接受けているのは「垣外番人」である。一方、ここには垣外番質の配分を受け、垣外番人が町用を勤めさせる「若き者」がいる。垣外仲間の内部では、小屋持非人が若き者と呼ばれ、彼らに抱えられた弟子が垣外番として派遣されるのであった。しかし、この白髪町の申渡し書では、実態と呼称が逆になっている。垣外仲間の内部と町内で呼称が逆になるのは、文化九（一八二二）年高麗橋三丁目「町内定」や慶応四年の道修町三丁目の規定でも同様である（塚田二〇〇七第一章）。こうした町法の理解には、その点を考慮しておくことが不可欠である。

さて、これらの町法において注目されるのは、白髪町の「例年申渡

帳」に典型的に見られるように、垣外番も町代や夜番人・髪結と並ぶ町抱えという位置づけにあることである。つまり、垣外仲間の存在はここには表現されていないことである。一方で、垣外仲間の身分内法では町の介在を排して垣外番株の売買などが規定されていたのである。

先に触れた都市法の第三のレベルで集団間の関係を相互に規定する法も多数存在していたが、ここでは二つの集団が異なる集団内法（第二レベル）をもち、相互に異なる論理が交錯する形で、現実の垣外番が存在していたのである。そこから生じてくる問題を、次に節を改めて考えてみよう。

### 三、垣外番株をめぐる対立

文政三（一八二〇）年三月に天王寺垣外若き者紋次郎の後家まつ（代判季助）は自らの垣外番株について（長吏・小頭）御仲に願ひ出た。まず、その願書によって願意を確かめておこう（『悲田院長吏文書』五五五頁、後掲史料③）。

まつ所持の瓦町一丁目夜番株・昼番半株を、長年当垣外の甚八に預けていたが、現在は甚八の倅太七が「相勤」めている。ところが、まづは経済的に困って株を戻すように宇兵衛を仲介にして太七に掛け合い、丁内へ引き合わせてくれるように頼んだ。太七は一向に応じず、宇兵衛が勝手に町内へ頼むように言うので、仕方なく「丁内の会所様」（＝町代）のところに行き、町内への披露を願った。ところが音沙汰がないので、再度聞き合わせたところ、町代か



ら「(太七と)月代りに勤めたらどうか」と提案された。そこで、太七に掛け合い、連名で町内に願書を提出した。ところが、町代から「この件について町年寄がどうしても不承知なので、願書を差し戻す」と言われた。

こうなった以上、太七が町内に同道して執り成してくれる外ないと頼むが、太七は応じない。こうした成行きは太七が町内に頼み込んだからだと推測される。それ故、「御仲様の御威光」でもって甚八と太七を召し出し、まつ(代判季助)を町内へ引き合わせ、「丁内」を戻すよう命じてほしい。

まつの出願の内容はほぼ以上の通りであるが、この経緯からは、興味深いことが窺える。第一には、垣外番株の貸借が行われていたことである。まつの所持する垣外番株を天王寺垣外の若き者甚八に預けていたのであるが、おそらく、夫紋二郎が死んだ後、女性であるまつでは町用を勤めることができず、甚八に預けて町用を達してもらうことにしたのである。この垣外番株を預ける・預かるということが垣外仲間の者同士で行われた時、町の側でそのような認識があったかどうかは不明である。垣外番の機能が十全に果たされることが重要であった、誰が勤めようと構わないということであれば、垣外番株の売買であろうと貸借であろうと、町にとっては関心の外であろう。

第二には、垣外番株を預かって町内に出入しているうちに、町内との関係が定着していくと、垣外仲間内部で定立されている垣外番株の所有を拘束することもあったことが窺われる。先述したように、各町

に垣外番を派遣する権利は垣外仲間内部で売買され(当事者同士の売買証文の作成と御仲の株帳面の切替え)、そこには町方は介在していない。

一方で、この売買によって所有権が移動したとしても、実際にその町内に弟子を派遣し、番賃と勧進による収益を得られなければ意味がない。つまり、垣外番株の所有(の意味)を実現するには、垣外番として町内で受け入れられることが不可欠なのである。多くの場合は、垣外仲間の秩序に従って、受け入れられたものと思われるが、最終的には町の意向が規制力を持つ。その場合、垣外番株を預かり町勤することと町との密接な関係を形成されると、垣外番株を所有しているというだけでは対抗できない状況が生ずるのである(垣外番定立プロセスへの示唆)。だからこそ、まつは垣外番株を返してもらうために、太七に町内へ披露してくれるように頼む必要があったのである。しかし、太七は町との関係に依拠して、それを妨害したのである。

なお、垣外番株所有の実現にとって町の意向が拘束性をもつことを確認できたが、垣外番株を預かった若き者が町に出向き、町廻りなどを行っているからこそ町内への定着が可能になるのである。言い換えれば、弟子が町内に派遣されているだけでなく、垣外番株を持つ若き者が町内に日常的に出入しているからこそ、こうした問題が生じることに注意しておきたい。

そのため、第三には、まつはこの問題の解決のため、(長吏・小頭)御仲の「御威光」で甚八と倅太七を召し出して町内を戻すように命じてほしいと願っていることである。太七がまつを町に披露して問題が

こじれなければ、垣外番株の返却が行われ、垣外仲間内部の手続きも済まされたかもしれない。しかし、甚八・太七が町との関係に依拠して反発したため、まっはこの出願に及んだのである。ここでまっはあくまでも、垣外番株の所有の問題を垣外仲間内のまっ（代判季助）と甚八・太八の関係の問題として処理しようとしていると言える。言い換えれば、まっは垣外仲間の論理に依拠して自らの利害を実現しようとしていると言える。

この一件からは、垣外番株を仲間内部秩序として存立させようとする垣外仲間の論理と町抱えとしてその意向に従属させようとする町の論理の両方が働き、交錯している状況をうかがうことができるのである。

先述したように、一八世紀末から一九世紀にかけて、垣外番株の売買や株帳面の切替えを願う史料が多く残されるようになるが、本来これは垣外仲間内部の手続きとして処理されるものであった。しかし、そこにも垣外番の存立に町の意向が働くことを示す痕跡が入り込んでくることがあった。

その一例を示そう。天保三（一八三二）年八月に、天王寺垣外の若き者久八は御仲に宛てて、自分が持つ籠屋町昼番株が休番になっていたので、今回「丁内」へ願い出たところ、先年の通り昼夜とも番を勤めるように言われたので、株帳面に記載してほしいと願っている（『悲田院長吏文書』五五六頁）。休番となっているのを回復しようとする場合、町内の了解が必要であったことがわかる。これまで株としては、

（休番とはいえ）昼番だけだったのが、この機会に昼夜番を行うことになったのである。

以上、一九世紀における大坂の非人仲間と町方の関係は、諸社会集団の重層と複合として存立する近世身分社会の特質を典型的に示すものであり、都市法の三つのレベルを弁別しながら、総合的に捉える「法と社会」の分析視角の有効性を示すものと考えられる。

#### 【参考文献】

- 塚田 孝 一九九四「身分制の構造」『岩波講座日本通史』一二、のち拙著『近世身分制と周縁社会』東京大学出版会、一九九七年所収
- 塚田 孝 二〇〇一『都市大坂と非人』山川出版社
- 塚田 孝 二〇〇二『歴史のなかの大坂』岩波書店
- 塚田 孝 二〇〇七『近世大坂の非人と身分的周縁』部落問題研究所
- 塚田 孝 二〇一〇a「都市法」吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市2 権力とヘゲモニー』東京大学出版会
- 塚田 孝 二〇一〇b「近世身分社会の捉え方—山川出版社高校日本史教科書を通して—」部落問題研究所
- 塚田 孝 二〇一一「近世後期・大坂における非人の「家」」『伝統都市を比較する—飯田とシャルビル』（『別冊都市史研究』4）山川出版社

#### 【主要史料】

- 岡本良一・内田九州男編『悲田院長吏文書』清文堂、一九八五年
- 長吏文書研究会編『悲田院長吏文書』解放出版社、二〇〇八年



【史料①】『悲田院長吏文書』五五一頁

乍恐書附ヲ以御願奉申上候

一 此度源七所持駿河町昼夜番株・神崎町利倉屋と申酒屋様壱軒番株、  
右式ヶ所源七ゝ私江譲り受申候二付、此段御聞届ヶ被成下、株御帳  
面御切替被為成下候得は難有仕合奉存候、以上、

享和三年

亥四月晦日

六郎兵衛 印

御仲様

【史料②】大阪府立中之島図書館蔵

文政五年午五月

町内定式帳

「町式申合帳」(内表紙)

(中略)

「例年申渡帳」(途中扉)

(中略)

垣外番人江申渡之事

一 垣外番之儀は、町人軒下浜先キ橋之上下等ニ非人乞食為立、亦は為  
臥せ不申様日々町中見廻り可申候、其上夜二入り火之元見廻り、并  
不審成者往来致候ハ、為立止不申様可致候、右昼夜番賃并布施米油  
代として一ヶ月二鳥目六貫八百文宛差遣し候上は、随分丁中無懈怠

様相勤可申候、尤右之内ニ而若キ者へ相分ヶ遣し可申候、町中繁く  
見廻り無油断相勤候儀急度可申付候事、

一 丁人中ニ悦事有之候節は祝儀、或は法事并不幸之砌志は家柄相応ニ  
遣シ候ハ、強而乞請申間敷事、

一 町用為相勤候若キ者木履雪踏等、決而無用之事、

右ヶ条之通相守、急度相勤可申事、

右之通被仰付候趣、奉畏候、以上

垣外番人

【史料③】『悲田院長吏文書』五五五頁

乍恐以上書御願奉申上候

一 私所持之瓦町壱丁目夜番株・昼番株半株之儀は、久々当所甚八江預  
置有之候処、此度不勝手二付相戻呉候様、當時同人倅太七相勤居候  
二付、同人江宇兵衛ヲ以段々為掛合、右丁内江為引合呉候様相頼候  
処、如何之趣意ニ候哉、此儀一向不承知之趣ニ而為引合具不申候上、  
其方ゝ勝手二丁内江相頼候様申之候二付、無抛御丁内之会所迄宇兵  
衛參り相頼候へハ、其段丁内江披露可致置候様被仰聞候而、一向御  
沙汰無之ニ付、又候御伺ニ罷出候処、被仰聞候は、尤成儀二付、双  
方為申合月代ニ相勤候得は、丁内ニも差支無之儀二付、其段書付ヲ  
以差出候様、御会所様ゝ被仰聞候間、右之趣太七江掛合之上、願書  
相認連印ニ而差出置候処、其後之御会所様ゝ被仰聞候は、何分御年  
寄様此儀不承知ニ付、願書差戻可申与被仰聞候二付、早速宇兵衛ゝ

太七江相談仕、此上は同道ニ而御丁内江参り、猶又貴様 宜敷執成  
被呉候様、段々太七江相談候得共、一向取敢不申、不法而已申之候  
ニ付、全同人御丁内江頼込、右体之取計仕候儀と奉存候、何分右様  
之儀ニ成行候而は、甚以歎ケ敷奉存候ニ付、何卒 御仲様之御威光  
ヲ以、右甚八・太七被為 召出、右丁内江為引合之上、無難ニ丁内  
相戻呉候様被為仰付被下置候様、偏ニ奉願上候、何分御慈悲ヲ以右  
之段御聞濟被為 成下候ハ、広太之御憐愍難有仕合奉存候、以上、

文政三年

死亡 紋次郎後家まつ代判

辰三月

季 助 印

御仲様

(大阪市立大学)